一般
寄稿

子ども学科

ブルキナファソをご存知ですか その２
ー柔道と国際交流ー

本間 玖美子 Kumiko HONMA
人間学部子ども学科教授

はじめに

「人と教育」（2014）において、「ブルキナファソをご存知ですか―ブルキナファソの子どもたち―」についての実践報告をした。この報告は、西アフリカの小さな国を少しでも多くの人に認知してもらうことが目的であった。報告のまとめでは、グローバル化時代におけるグローバル人材の育成が問われていることを述べ、そのあり方としては、諸外国での実践的体験から異文化に触れることが、教員や学生に必要であり、さらにその実践は、開発途上国といわれる国への理解と協力が望まれることを報告した。

一般社団法人国際文化交流協会（International Culture Exchange Association「ICEA」以下ICEAと略す）では、開発途上国ブルキナファソにおいて、同国での柔道に関わるドキメンタリー映画制作を計画している。其の計画は、ブルキナファソの柔道指導者と、柔道を学んでいる少年少女達を柔道発祥の地・日本に招待し、交流の機会を設けるというものである。日本発祥の柔道が西アフリカの小さな国で盛んに行われていることから、日本とブルキナファソの国際交流の一環として実施されている柔道と国際交流に注目した。

かつて、フランスでの柔道ブームが日本で大きく報じられた時期があった。フランスの柔道は、日本と伍するくらいの技術と技を持ち多くの大会での活躍は目覚しい。ブルキナファソはかつてフランス領であり、世界最貧国

のひとつと言われている。成人識字率は3割以下、公用語であるフランス語を話す人も多くはない。このような状況のブルキナファソでも柔道は盛んに行われている。

国際協力機構（Japan International Cooperation Agency「JICA」）が主催する青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers「JOCV」）では各国の要請を受けて、多くの技術者、教育者が経済的援助の必要な諸外国に派遣される。其の中でも柔道指導者への要請は諸外国から多いという。経済的援助の必要な開発途上国における柔道と国際交流について検討する。

Ⅰ 柔道

柔道とは、徒手を主体とした攻撃・防御を行う武道の一種であり、その技術的な源は日本古来の徒手格闘である力くらべや相撲にある。「柔よく剛を制す」この言葉は柔道の基本理念であり、武術柔道を表現する最も特徴的な言葉である。

嘉納治五郎（1860～1938）（以下嘉納と略す）は日本古来の柔術を改良すれば武術の他に知育・徳育・体育として社会的に有意義なものになると考え「精力善用」「自他共栄」の精神を根幹に1882（明治15）年、講道館柔道を創立した。講道館柔道の根本原理を「心身の力を最も善く使用する道」すなわち「精力善用」と説き、「己を完成し、世を補益すること」すなわち「自他共栄」を柔道修行の目的とした。柔道は、心身を鍛錬して、その力を最も有効に使う人間形成の道であると説いた。加納は柔道を通しての人間教育に並々ならぬ情熱を抱いていた。そのことは講道館文化会を創設した時の次のような宣言からも分かるだろう。

- 個人は身体を強健にし智徳を磨くこと
- 国家の繁栄をはかるため、常に必要な改善をなすこと
- 社会では個人団体各々互いに相助け、相識り融和をはかること
- 世界に対しては人種的偏見を去り、文化の向上に努め人類の共栄を図ること

この宣言は、個人の身体修練が、社会や国家、そして世界との関係へと拡大していく考えであり、柔道やスポーツの価値を最大限に引き出したといえる。嘉納の思想が、柔道を世界に導いたのである。

Ⅱ スポーツを通じた国際協力・平和

国際協力とは、国際社会の平和と安定、発展のために開発途上の国や地域の人々を支援することである。その支援とは、貧困による経済的支援の意味が大きいと考える。国際的な「貧困」の定義の代表的なものとして、経済協力開発機構（Organization for Economic Co-operation and Development : OECD）の下部機構である開発援助委員会（Development Assistance Committee : DAC）による5つの要素がある。それは、①所得や資産といった経済面、②人権や自由といった政治面、③立場や尊厳といった社会・文化面、④保健や教育といった人間面、⑤脆弱性への保障や保護面、である。これらの要素は貧困の程度をみるのではなく、その多用な側面を理解しようとするものである。

齋藤（2015）らは、スポーツを通じた国際協力を「スポーツを通じた開発」と捉え、スポーツとは関係が薄いと考えられる社会課題の解決にスポーツの持つ力を動員する考えである。国際社会での社会課題とは「地球規模の課題」と呼ばれ、特に開発途上国で深刻であり、解決の為の処方箋を持たないことが問題であり、具体的には、貧困、紛争、ジェンダー、感染症、AIDS、などである。これら地球規模の課題は、国や地域、居住地や個人によっても解決に向けた道筋が異なり、その複雑さゆえに「糸口」や「きっかけ」、「起爆剤」や「刺激」としてのスポーツの活用が試みられていると捉えている。

また、スポーツと平和について齋藤（2015）らは、スポーツの持つ非営利性や平等性は、人々が触れ合い、助け合い、競い合うということでは「平和」と共通する観念を持つと捉え、さらに、スポーツの範疇に「武道」も含めることが可能であるなら、「武道」のあり方こそ平和への願いがこめられているという。戦いの中から生ま

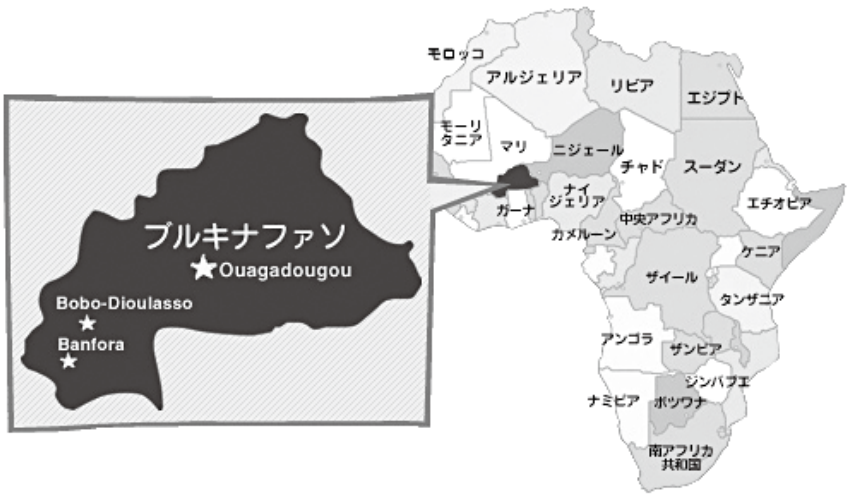

図1　ブルキナファソの位置

れた「武術」が「道」と結びついて「武道」となったが、生死をかけた戦いの中でうまれた武術は、その戦いを二度と行わない、行わせないためのものであり、平静な世、すなわち「平和」への願いを術にこめたと述べる。まさに、嘉納が説く柔道平和思想であり、それは、「柔道は単なるスポーツやゲームではなく、人生哲学であり、芸術であり、科学である。それは個人と文化を高める為の方法である。柔道は芸術・科学として、いかなる外部からの影響―政治的、国家的、人種的、財政的など―にも拘束されない。全てが終局の目的である人類の利益へ向かうべきものである。[1]」

まさに、この柔道平和思想により、国際交流の一手段としての柔道があるといえる。

Ⅲ　ブルキナファソ柔道

柔道は国際的に普及が進み、アメリカ・イギリス、ドイツ、オランダなど世界のさまざまな国に受け入れられている。フランスにおいても柔道は幅広く受け入れられており、その教育的効用も受け継がれている。西アフリカのブルキナファソはかつてフランス領であり、公用語は今もフランス語である。フランス柔道には武士道と騎士道を融合させた８つの心得があり、それは、「友情」「勇気」「謙虚」「礼儀」「誠意」「名誉」「尊敬」「克己」で、教育における目的価値として重要視されている。これらのことから、概ねフランス柔道がブルキナファソに受け継がれたと考える。

ブルキナファソにおいて、柔道は最も身近な格闘技として、全国的に普及している非常に人気の高いスポーツである。ブルキナファソ柔道連盟はスポーツ省の傘下に1963年に創設され、今では全国に25クラブを有し活動している。ブルキナファソ柔道連盟は、これらのクラブの道場を通じて、ブルキナファソにおける柔道の普及とレベルアップ、柔道を通じた青少年の健全な育成に重要な役割を果している。わが国・日本としては、外務省を通じて、伝統武道である柔道の普及が日本理解の促進に繋がるものとして積極的に支援している現状であり、またそれは、柔道を通じた人的交流や日本独自の文化・精神への理解の高まりが促進されることをも期待している。しかし、柔道の精神性に対する深い理解や技能向上に対する熱意・意欲はあるものの、そのための機会・手段が欠如している現状である。この現状を改善すべく、平成24年２月３日から３月１日まで国際交流基金文化協力事業「柔道指導」の計画のもと、ブルキナファソ国

内のワガドゥグ市、バンフォラ市、ボボデュラソ市、ポー市の４会場で、世界水準の日本人指導者による高いレベルの柔道指導が実施された。

ICEAは、既に述べたが、開発途上国ブルキナファソの柔道愛好家たちの柔道国日本への熱い思いを日本への訪問という形で実現し、そのドキュメンタリー映画制作を試みる。個人的レベルでの国際交流であるが、既にブルキナファソの柔道家との交流を深め、同国のスポーツ省の協力も得て映画制作に取り組んでいる。同国の柔道指導をうけている少年少女３名とその指導者２名を日本に招待することで柔道による国際協力・国際交流・異文化理解を深めることが出来る大変素晴らしい計画である。柔道発祥の地日本では、講道館での交流はじめ、日本文化体験の機会と場を設け、日本の子ども達との交流も実施する予定である。ICEAのブルキナファソへの柔道支援は、上述のような貧困による経済援助ではないが、スポーツ・柔道による国際協力・国際交流・異文化理解という意味での支援であることには間違いは無い。このような支援は国レベルでは到底出来ないことであり、多くのボランタリー精神に富む方々の気持ちを受けて実行できる尊い事業である。

おわりに

2016年８月ブラジルのリオデジャネイロで開催されたオリンピック、パラリンピックでの日本選手の活躍は著しいものであった。日本のメダル獲得数が過去最高の41個で、とりわけ柔道におけるメダルの獲得は驚異的だった。このような時期に柔道と国際交流について述べるには、「時既に遅し」という感を免れない。しかし、ブルキナファソ柔道と国際交流について検証することで、柔道と国際交流について、また柔道を通しての教育に生涯をささげた嘉納の功績を改めて知ることが出来た。嘉納であったからこそ平和思想の柔道を世界に広めることができたといえる。嘉納による柔道を通じての国際交流の理論と実践は、今後の国際交流における大きな指標であり第一歩となった。

開発途上国ブルキナファソでの柔道を通した教育は、講道館柔道の基本的思想とフランスにおける柔道の８つの心得を融合させて行われていると推察できた。其のブルキナファソ柔道の指導者や子ども達は柔道発祥の地日本への訪問を強く希望している。経済的国際協力はできないまでも、個人的レベルでの国際交流を実践するためにICEAは、ブルキナファソの人々の希望をかなえるべく日々努力をしている。

グローバル化する社会での、大学教育におけるグローバル人材の育成は、学生たちに対して国際的なボランティア活動を促し、実践する機会を設けることではないだろうか。ICEAは開発途上国といわれているブルキナファソの柔道家との国際交流を日本にて実現させようとしている。まさにこの機会を学生たちに活用させたいものである。

註

(1) 生誕150周年記念出版委員会編（2011）『気概と行動の教育者　嘉納治五郎』　筑波大学出版会198頁

参考文献

1） 生誕150周年記念出版委員会編（2011）『気概と行動の教育者　嘉納治五郎』　筑波大学出版会
2） 嘉納治五郎（1997）『私の生涯と柔道』　人間の記録　第２巻　日本図書センター
3） 菊幸一編、日本体育協会監修（2014）『現代スポーツは嘉納治五郎から何を学ぶのか』　ミネルヴァ書房
4） 齋藤一彦、岡田千あき、鈴木直文著（2015）『スポーツと国際協力』　大修館書店
5） 本間玖美子（2014）「ブルキナファソをご存知ですか―ブルキナファソの子どもたち―」　人と教育　第８号　目白大学教育研究所